三中だより

令和３年度　７月号

令和３年７月１９日発行
荒川区立第三中学校
（学校通信　Ｎｏ．６）
校長　　小　柴　憲　一

「16日間の夏休み」から「42日間の夏休み」　－家族の時間を大切に－

昨年度は、4･5月が臨時休業になったため、夏休みは8月8日（土）から23日（日）の16日間でした。そこで、昨年度の夏休みのしおりでは「崩れた生活リズムを戻す余裕はないので、1日たりとも生活リズムを崩さないよう、毎日適度な学習と運動をし、そのままの状況で2週間後の始業式を迎えること」という内容の巻頭文を書きました。

今年度は42日間あります。ただし、新型コロナウイルスの感染拡大が懸念される中、ご家族での移動についても制限されることと思います。しかし、たとえ移動を伴う家族旅行などがなくても、ご家族の時間は必ずつくってください。保護者の就労の関係上、毎日というわけにはいかないとは思いますが、同じテレビ番組を見て笑うという時間よりも、もっと積極的なご家族の時間をつくってほしいと思います。

例えば、「時事問題についてお子さんの意見を聞いて保護者の方から質問をしてみる」「新聞の社説について互いの考えを述べてみる」「保護者の就業状況について話をして感想を聞いてみる」「お子さんの将来の夢について話しを聞いてみる」などがあると思います。また、2･3年生のお子さんであれば「具体的な進学希望先とその理由を聞く」「上級学校卒業後の進路について尋ねる」「高校を一緒に見学して感想を述べ合う」などもあると思います。

大切なことは、お子さんの感想･意見などを『そんなの甘いんだ』『まだまだ子どもだな』などと頭から否定するのではなく、うなずいたり、あいづちをうったりし、ときにはお子さんの言いたい要点を繰り返してあげたりしながら傾聴することです。そして、保護者の方が話すときは、いつもより落ち着いたトーンの声でゆっくりとしたスピードで話しかけてみてください。親子の関係によっては、お子さんは体を斜めにして話し始める場合があるかもしれませんが、保護者の方は正対し、いつもと違った聞き方･話し方をしてみてください。

切り出すフレーズは「＜お子さんの名前＞はどう思う？」です。

志望校決定のように、そこである程度の結論までたどり着きたい場合は別ですが、その他はそこで結論を出す必要は全くありません。保護者の方は「自分の子どもはそう考えているのか」、お子さんは「自分の親はそう感じているのか」と互いの考えや思いを知ることと、そういう場面をつくることが一番の目的です。

このような時間は、本来は小学校高学年からつくり始めるのが効果的ですが、中学生になってからでも遅くはありません。このような時間のあるご家庭のお子さんは、自分に困りごとができたときに親に相談をします。また、家庭内で自分の考えを述べる機会を体験することで、家族の一員としての自覚がより一層高まります。さらに、保護者はお子さんの些細な変化に気付くことができるようになります。

中学生は、私たち大人よりも正義感はとても強い時期です。報道などを見たり聞いたりしながら、大人のすごさを知る反面、大人は仕方ないと思ってしまっている「世の中の理不尽さ」にも気付いているはずです。一方、子どもたちは学校で様々な意見に触れ、自分の考えも発表したり文字で表現したりしています。

ぜひ、お子さんのそんな内面に触れてみて、成長を実感してみてください。そしてその感想は、そのまま素直な言葉でお子さんに伝えてみてください。「大人っぽくなってきたんだね。」「自分も勉強しなくちゃな。」などと。

1年延期された東京オリンピック・パラリンピック

本来であれば昨年開催されていた「TOKYO　2020　オリンピック・パラリンピック」でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響により1年延期され、オリンピックが7月23日（金）に、パラリンピックが8月24日（火）に、ともにオリンピックスタジアムで開会式が行われます。

1年延期されたことにより、アスリートには大きな影響があったことと思います。

すでに、昨年の選考会に焦点を絞って、2～3年計画でモチベーションと技能を高めてきたアスリートにとっては、さらに、あと1年間努力をし続けなければならないのです。高校進学でたとえるなら、出願も終えて「さあ受験」というときに、「全国一斉に今年度の受験は延期します。来年度、今の中学2年生と一緒に実施します。」と言われるようなものです。まずこのようなことは起こりえないことですが、それが起きてしまい、アスリートたちはそれを受け入れざるを得なかったのです。また、そのアスリートをサポートする方々も、さらにあと1年サポートし続けることを余儀なくされたのです。先ほどの受験で言えば、受験生はあと1年受験勉強を続けるとともに、ご家族もあと1年受験生に気遣った生活をすることになるということです。

種目によって適齢期があると言われ、個人個人にとってもピークと思われる時期があり、アスリートとはいえ競技以外の私生活などに関するご自身のキャリアプランもあるはずです。したがって、「幸運にも代表選手になれたアスリート」もいれば「昨年なら代表選手になれたのに今年になったために代表選手になれなかったアスリート」もいるはずです。さらに、先日、オリンピック・パラリンピック講演会で本校にお越しになられた、パラリンピック陸上の　村上　清加　選手がご講演の中で、「私のパラリンピック陸上競技としての選手生命は昨年までと決めていたので、今年はすでに引退し、パラリンピックには挑戦しませんでした」と話されていたように、昨年を最後の節目としていたアスリートもいたはずです。日本代表になった選手、なれなかった選手それぞれが、様々な思いをもっていることと思いますが、私が最も印象に残り、自分自身に対して叱咤激励しなければならないと思っていることは、ほとんどのアスリートが「置かれた環境の中で自分は何をすべきか」と、力強く前向きに生きていることです。村上　清加　選手も引退してパラリンピック大会に出場できなかったことを引きずって生きているのではなく、引退した立場で何ができるかを考えていました。

一時期、「コロナ禍でオリンピック・パラリンピック大会を開催すべきかどうか」について、メディアが世論調査したり、街頭インタビューしたり、医療の専門家の立場で述べられる意見が報道されていたり、国会でも議論の中心となったりしていました。それは、言論・表現の自由であったり、政治的な議論であったりするので、そのことに対する賛否はありません。しかし、開催の有無について、日本代表になった選手や、なる可能性の高い選手などに意見を求めている場面では、憤りを感じました。彼らには彼らなりの考えはあるのはもちろんですが、それを表現する立場ではないし、そのようなことに労力をつかわせたり、気遣いさせたりするのは、延期した1年も努力し続けてきたアスリートに対してすることではないと感じました。

オリンピック・パラリンピックでは、日本代表選手が日本代表になったことに誇りをもっていただき、競技当日にピークをもっていって最高のパフォーマンスを出してほしいと思います。この夏、どのような観戦の仕方になるのか分かりませんが、代表になれなかったアスリートの思いもかみしめながら観戦したいと思います。

12歳以上のワクチン接種について

学校における集団ワクチン接種の話題が注目されたあと、文部科学省は「同調圧力を生みがち」という一つの理由をあげ、「現時点では推奨しない」と通知を発出しました。

「同調圧力」とは、教育では「特別の教科　道徳」の教材研究でよく使われる用語で、「少数意見をもっている子どもが、それが正しいにもかかわらず、多数の誤った意見に知らず知らずのうちに合わせてしまう」場面で使われます。特に、「公正・公平」を内容とするいじめ問題を資料として扱っているときには、子どもたちに「自分も周囲の人に合わせてしまい、悪いと分かっていながらやってしまうことがある」ということに自分事として気付かせるねらいのとき、指導案に「同調圧力」という用語が出てきます。

さて、学校における集団接種で、最初に同調圧力が生み出されてしまうのは、子どもたちではなく保護者の皆様だと私は考えます。接種するかどうかの判断は、最終的には保護者がするものです。「みんなが受けさせるのなら、我が家も受けさせなければならないかな」「接種をさせないと、友だちから何か言われてしまわないか」と考えてしまったとき、「同調圧力が働いている」ということになります。

確かに、子どもたち同士の中で、「あの人は受けたんだって」「あの人は受けなかったんだって」という話題が出たり、「自分はワクチン接種受けたから大丈夫なんだ」と主張したりする子どもが出てくるようになると、保護者の皆様も不安な思いになることと思います。

荒川区では、学校における集団接種は行いません。

区報でもご存じかと思いますが、本校ホームページでは、荒川区のワクチン接種に関する最新情報を、簡潔に要点をまとめたり、関連サイトにリンクさせたりして情報発信してまいりました。その中で、「12歳以上の予約も可能になった」旨の記載もさせていただいております。これは12歳以上の子どものワクチン接種を推奨しているわけではなく、あくまでも本区のワクチン接種にかかわる情報の中で、保護者の皆様に関係することをお伝えしているだけです。

保護者の皆様は、お子様にワクチン接種をさせるかどうかは荒川区民としてお考えいただくことになります。そこで、保護者の皆様に、3つのお願いがございます。

第一に、なるべく保護者同士では、子どもに接種させるかどうかに関する話題をすることを避けていただければと思います。接種に対する考えは、個人の価値観に関わる場合が多いこと、接種させたくても健康上の理由で接種させられないお子さんもいるかもしれないからです。

第二に、SNS上で流れている様々な情報で不安な思いになる場合は、その思いだけで判断せず、医師に相談をしていただき、適切な助言を受けてご判断くださるようお願いいたします。

第三に、子ども同士が、「接種した」「接種していない」などの会話を軽率にすることのないよう、十分にお子様に言い聞かせてください。各家庭にはそれぞれの考えがあって判断していることであり、そこに踏み込むような発言は、時に、友だちやその背景にいる家族を不安な思いにさせたりしてしまうことがあることを理解させてください。

学校では、今後、保護者の方からの欠席連絡などの際、ワクチン接種をしたという情報を知り得ることがあるかもしれませんが、それは決して外部に漏らすことはいたしません。さらに、国・都・区からの通知等がない限り、学校の判断により、誰が接種を受けて誰が受けていないかなどの調査をすることも決してございません。

今後、報道では年齢層に分類した接種率等が公表されていくものと思われます。そして、その中には12歳以上16歳未満などの分類もあるかもしれません。

しかし、ワクチン接種をしない子どもの中には、健康上の理由でできない子どもがいるということ、さらに、接種については、そのご家庭の考えに基づくものであり、何よりも尊重されなければならないことを踏まえ、保護者の皆様も冷静な対応をとるようにしていただきたく存じます。

教職員のワクチン接種

教職員も住所を有する自治体における制度に基づくワクチン接種を受けたり、荒川区や東京都でも始めた教職員対象の職域接種を受けたりするなど、本人の意思によりワクチン接種を受ける教職員が増えてくると思います。

接種後の副反応については、どの程度なのか、どのような症状なのか、どのような人に出やすいのか、あるいは全く出ないのかなど、個人差もあり接種してみなければ分かりません。

つきましては、副反応等の症状により急遽教員が出勤できなくなり、夏季休業期間中に予定されている部活動・学習活動等が中止になったりするなどの予定の変更があり、その連絡が直前になってしまうことなどがあるかもしれませんがご理解くださるようお願いいたします。

修学旅行無事終了

延期して7月11日（日）から実施した修学旅行は無事に帰校することができました。保護者の皆様には実施できるかどうかご心配をおかけるとともに、お子様が寄託するまでご不安な思いにさせてしまったことと思います。

京都市では夏祭りの準備が始まっており驚きましたが、子どもたちの様子につきましては、本校ホームページに写真として掲載してありますのでご覧ください。

お知らせ

●荒川区中学校総合体育大会男子バスケットボールの部で以下の成績を収めました。
　張　宰洪　　Best5賞（本大会を通じて最も優秀なプレーをした区内の5名に送られる賞）
●荒川区中学校総合体育大会ソフトテニスの部で以下の成績を収めました。
　男子個人戦　第3位　家根優太（3年）・小川祐真（3年）　＜都大会出場＞
　男子団体戦　第1位　古橋創人（3年）・家根優太（3年）・島崎幸大（3年）・余語玲羅（3年）
　　小川祐真（3年）・佐々木翔悟（3年）・林　優樹（3年）・三國敬吾（2年）
　　＜都大会出場＞　　＜名簿順に表記しています＞
●荒川区中学校総合体育大会卓球の部で以下の成績を収めましたので紹介します・
　個人戦　第2位　磯貝優里（3年）　＜都大会出場＞（なお、学校枠で他にも都大会出場者はいます。）
●荒川区中学校総合体育大会バレーボール女子の部で以下の成績を収めました。
　女子バレーボール部　第3位
●東京都中学校バドミントン選手権大会で以下の成績を収めました。
　女子シングルス　ベスト8　土屋　明莉（3年）

御礼

今年度は４月に入学式・始業式を実施することはできましたが、感染防止対策を常に考えながら、「できない」ではなく「どうしたらできるか」と教職員一同、知恵を絞りながらの１学期でした。残念ながら、学校公開は依然として許可が下りず実施することがなかったとともに、宿泊行事については日程変更をすることとなってしまいましたが、保護者・地域の皆様には本校の教育活動にご理解をいただくとともに、本校の子どもたちを常に気にかけていただき深く感謝申し上げます。

２学期もまだまだ余談を許さない状況が続くことと思いますが、皆様の厚いご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。